

# 山形市立滝山小学校

## 「学校いじめ防止基本方針」

### 1 はじめに

「いじめ」とは、児童生徒に対して、当該児童生徒が在籍する学校に在籍している等当該児童生徒と一定の人的関係にある他の児童生徒が行う心理的又は物理的な影響を与える行為（インターネットを通じて行われるものを含む。）であって、当該行為の対象となった児童生徒が心身の苦痛を感じているものをいう。けんかやふざけ合いであっても、児童生徒の感じる被害性に着目し、該当するか否かを判断する必要がある。また、好意で行った行為が、相手に苦痛を感じさせてしまった場合も、いじめに該当する（ただし、いじめという言葉を使わずに、柔軟に対応することも可能）。

いじめはどの子どもにも起こりうる、どの子どもも被害者にも加害者にもなりうるという事実を踏まえ、児童の尊厳を保持することを目的に、教育委員会、学校、地域住民、家庭、その他の機関及び関係者との連携のもと、いじめ問題の克服に向け、未然防止、早期発見、早期対応・組織的対応等に全力で取り組むものとする。

### 2 未然防止

#### （1）教職員による指導と児童に培う力

- ・ いじめの態様や特質、原因・背景、具体的な指導上の留意点などについて、校内研修や職員会議で周知を図り、平素から教職員全員の共通理解を図っていく。
- ・ 児童に対して、全校集会や学級活動などで校長や教職員が、日常的にいじめの問題について触れ、「いじめは人間として絶対に許されない」との雰囲気为学校全体に醸成していく。
- ・ 常日頃から、児童と教職員がいじめとは何かについて認識を共有する手段を講ずる。
- ・ 一人一人を大切にしたい分かりやすい授業づくりを進め、授業についていけない焦りや劣等感などが過度のストレスとならないようにする。
- ・ 教職員の言動が児童を傷つけたり、他の児童によるいじめを助長したりすることのないよう、指導の在り方に細心の注意を払う。
- ・ 自他の意見の相違があっても、互いを認め合いながら建設的に調整し、解決していける力や、自分の言動が相手や周りにどのような影響を与えるかを判断して行動できる力を育てる。
- ・ ストレスを感じた場合でも、それを他人にぶつけるのではなく、運動・スポーツや読書などで発散したり、誰かに相談したりするなど、ストレスに適切に対処できる力を育てる。
- ・ 学校の教育活動全体を通じ、一人ひとりが活躍でき、他者の役に立っていると感じることでできる機会を提供し、自己有用感が高められるようにする。
- ・ 学校の教育活動全体を通じ、目標や目的を明確にし、主体的に取り組むことで困難な状況を乗り越えるような機会を提供し、自己肯定感が高められるようにする。

## **(2) いじめ防止等対策のための組織設置（法22条：必置）**

- ① いじめの防止等に関する措置を実効的に行うため、下記関係者からなる「いじめの防止等の対策のための組織」を置く。
  - 校内職員：校長、教頭、主幹教諭、教務主任、各学年主任、特別支援コーディネーター、生徒指導主任、教育相談担当、養護教諭
  - 校外関係者：同窓会会長、主任児童委員、滝山交流センター所長、主任学校医、父母と教師の会会長
- ② 当該組織は学校が組織的にいじめの問題に取り組むに当たって中核となる役割を担い、下記の具体的取組を行う。
  - いじめを正しく理解し対応するための校内研修や職員会議等の情報提供の機会を設定する。
  - 学校基本方針に基づく取組の実施や具体的な計画の作成・実行・検証・修正等を行う。
  - いじめの相談・通報の窓口としての対応を行い、いじめの疑いに関する情報や児童の問題行動等に係る情報の収集と記録、共有を行う。
  - いじめの疑いに係る情報があった時には緊急会議を開き、いじめの情報の迅速な共有、関係児童への事実関係の聴取、指導や支援の体制・対応方針の決定と保護者との連携等の対応を組織的に行う。

## **(3) 児童の主体的な取組**

- ・ 児童会によるいじめ撲滅の宣言や相談箱の設置等、児童自らがいじめの問題について主体的に考え、いじめの防止を訴えるような取組を推進する。これら主体的な取組をとおし、「いじめられる側にも問題がある」「大人に言いつける（チクる）ことは卑怯である」「いじめを見ているだけなら問題はない」等の考え方は誤りであることや、ささいな嫌がらせや意地悪であっても、しつこく繰り返したり、みんなで行ったりすることは、深刻な精神的危害になること等を学ぶ。

## **(4) 家庭・地域との連携**

- ・ 学年、学級懇談会、家庭訪問、学校（学級）だより等を通じて「学校いじめ防止基本方針」について理解を得るとともに、地域や家庭に対して、いじめの問題の重要性の認識を広めながら緊密な連携協力体制を図っていく。
- ・ 学校、家庭、地域がネットいじめを含めたいじめの問題について協議する機会を設け、地域と連携した対策を推進する。

# **3 早期発見**

## **(1) 見えにくいいじめを察知するための具体的な対応**

- ・ いじめは大人の目に付きにくい時間や場所で行われたり、遊びやふざけあいを装って行われたりするなど、大人が気づきにくく判断しにくい形で行われることを認識し、日頃からの児童の見守りや信頼関係の構築等に努め、児童が示す小さな変化や危険信号を見逃さないようアンテナを高く保つとともに、教職員相互が積極的に児童の情報交換、情報共有を行い、いじめを積極的に認知するよう努める。
- ・ 定期的な無記名式アンケート調査により、短期におけるいじめの全体像を把握しながら、定期的な教育相談・日常の観察による声かけを実施することにより、個別の状況把握に努める。また、児童が日頃からいじめを訴えやすい学級経営や信頼関係の構築に努める。

- ・ 休み時間や放課後の雑談の中などで児童の様子に目を配ったり、個人ノートや生活ノート等、教職員と児童の間で日常行われている日記等を活用して交友関係や悩みを把握したり、個人面談や家庭訪問の機会を活用する。

## (2) 相談窓口などの組織体制

- ・ 児童や保護者の悩みを積極的に受け止められているか、定期的に体制を点検し、児童及びその保護者、教職員が抵抗なくいじめに関して相談できる体制を整備する。
- ・ 教育相談室の利用、電話相談窓口について広く周知する。教育相談等で得た児童の個人情報については、対外的な取扱いの方針を明確にし、適切に扱う。
- ・ 児童の相談に対し、「大したことではない」「それはいじめではない」などと悩みを過小評価したり、相談を受けたにもかかわらず真摯に対応しなかったりすることは絶対にしない。

## (3) 地域や家庭との連携

- ・ より多くの大人が子どもの悩みや相談を受け止めることができるようにするため、学校と家庭、地域が組織的に連携・協働する体制を構築する。

# 4 早期対応・組織的対応

## (1) 早期対応による事実確認と連絡・相談

- ・ 発見・通報を受けた場合には、特定の教職員で抱え込まず、速やかに周囲に相談する。遊びや悪ふざけなど、いじめと疑われる行為を発見した場合、その場でその行為を止め、事実確認を行い、加害児童へ適切に指導する。軽微な事案でも、関係職員へ連絡し、以後の見守りに生かす。
- ・ 児童や保護者から「いじめではないか」との相談や訴えがあった場合には、真摯に傾聴する。
- ・ ささいな兆候であっても、いじめの疑いがある行為には、早い段階からの確に関わりを持つ。その際、被害児童や発見・通報してきた児童の安全を確保する。

## (2) 組織的な対応と設置者への報告

- ・ 発見、通報を受けた教職員は躊躇なく、校内の「いじめの防止等の対策のための組織」に報告し組織的対応を図る。
- ・ 当該組織が中心となり、速やかに関係児童から事情を聴き取るなどして、いじめの有無の確認を行う。
- ・ 事実確認の結果は、校長が責任を持って学校の設置者に報告するとともに、被害・加害児童の保護者にも連絡し、事後の対応に当たる。

## (3) いじめを受けた児童又はその保護者への支援

- ・ いじめを受けたとされる児童から、事実関係の聴取を行う。その際、いじめられる側にも責任があるという考え方はあってはならず、「あなたが悪いのではない」ことをはっきりと伝える等、自尊感情を高めるよう留意する。また、児童の個人情報の取扱い等、プライバシーには十分に留意して以後の対応を行う。
- ・ 家庭訪問等により、その日のうちに迅速に保護者へ事実関係を伝える。いじめを受けた児童や保護者に対し、徹底して守り通すことや秘密を守ることを伝え、できる限り不安を除去するとともに、事態の状況に応じて、複数の教職員の協力の下、当該児童の見守りを行う等、いじめを受けた児童の安全を確保する。
- ・ いじめを受けた児童にとって信頼できる人（親しい友人や教職員、家族、地域の

人等)と連携し、いじめを受けた児童に寄り添い支える体制をつくる。いじめを受けた児童が安心して学習その他の活動に取り組むことができるよう、必要に応じていじめを行った児童を別室において指導する等、いじめを受けた児童が落ち着いて教育を受けられる環境の確保を図る。状況に応じて、心理や福祉等の専門家、教員経験者・警察官経験者など外部専門家の協力を得る。

- ・ いじめが解決したと思われる場合でも、継続して十分な注意を払い、折りに触れ必要な支援を行う。また、事実確認のための聴き取りやアンケート等により判明した情報を適切に提供する。
- ・ いじめが解消したと判断するには、少なくとも、次の①と②の要件を満たす必要がある。
  - ① 被害者に対する心理的行為または物理的影響を与える行為が止んでいることが相当の期間継続していること(少なくとも3ヶ月以上)。
  - ② 被害児童本人及びその保護者に面談等により心身の苦痛を感じていないことを直接確認すること。

#### (4) いじめを行った児童への指導及びその保護者に対する助言

- ・ 教育的配慮の下、毅然とした態度で加害児童を指導する。その際、謝罪や責任を形式的に問うことに主眼を置くのではなく、社会性の向上等、児童の人格の成長に主眼を置いた指導を行う。
- ・ いじめを行ったとされる児童からも事実関係の聴取を行い、いじめがあったことが確認された場合、複数の教職員が連携し、必要に応じて心理や福祉等の専門家、教員・警察官経験者など外部専門家の協力を得て、組織的にいじめを止めさせ、その再発を防止する。
- ・ 事実関係を聴取したら、迅速に保護者に連絡し、事実に対する保護者の理解や納得を得た上、学校と保護者が連携して以後の対応を適切に行えるよう保護者の協力を求めるとともに、保護者に対する継続的な助言を行う。
- ・ いじめを行った児童への指導に当たっては、いじめは人格を傷つけ、生命、身体又は財産を脅かす行為であることを理解させ、自らの行為の責任を自覚させる。なお、いじめを行った児童が抱える問題など、いじめの背景にも目を向け、当該児童の安心・安全、健全な人格の発達に配慮する。児童生徒の個人情報等の取扱い等、プライバシーには十分に留意して以後の対応を行っていく。いじめの状況に応じて、心理的な孤立感・疎外感を与えないよう一定の教育的配慮の下、特別の指導計画による指導のほか、警察との連携による措置も含め、毅然とした対応をする。
- ・ 教育上必要があると認めるときは、学校教育法第11条の規定に基づき、適切に、いじめを行った児童に対して懲戒を加えることも検討する。ただし、いじめには様々な要因があることに鑑み、懲戒を加える際には、主観的な感情に任せて一方的に行うのではなく、教育的配慮に十分に留意し、いじめを行った児童が自ら行為の悪質性を理解し、健全な人間関係を育むことができるよう成長を促す目的で行う。又、状況に応じて出席停止制度の活用について山形市教育委員会と協議する。

#### (5) 集団へのはたらきかけ

- ・ いじめを見ていた児童に対しても、自分の問題として捉えさせる。たとえ、いじめを止めさせることはできなくても、誰かに知らせる勇気を持つよう伝える。また、はやしたてるなど同調していた児童に対しては、それらの行為はいじめに加

担する行為であることを理解させる。なお、学級全体で話し合うなどして、いじめは絶対に許されない行為であり、根絶しようという態度を行き渡らせるように指導する。

- ・ いじめの解決とは、いじめを行った児童によるいじめを受けた児童に対する謝罪のみで終わるものではなく、当事者や周りの者全員を含む集団が、修復を経て好ましい集団活動を取り戻し、新たな活動に踏み出すことをもって判断されるべきであることを指導する。また、全ての児童が、集団の一員として互いを尊重し、認め合う人間関係を構築できるような集団づくりに努める。特に、発達障がいを含む障がいのある児童、海外から帰国した児童や外国人の児童、性同一性障がいや性的指向・性自認に係る児童、被災児童生徒等、教育的諸課題等から特別な配慮が必要な児童については、学校として、日常的にその特性を踏まえた適切な支援・指導を組織的に行う。

#### (6) ネットいじめへの対応

- ・ ネット上のいじめとは、携帯電話・スマートフォンやパソコン、ゲーム機や音楽再生機等を通じて、インターネット上のウェブサイトの掲示板・ブログ・プロフィールに特定の児童生徒の悪口や誹謗・中傷を書き込んだり、誹謗・中傷のメールを送ったり、SNSに画像や動画を掲載したりする方法により、いじめを行うものである。
- ・ パスワード付きサイトやSNS（ソーシャルネットワーキングサービス）、携帯電話のメールを利用したいじめなどについては、より大人の目に触れにくく、発見しにくいいため、情報モラル教育に学校全体で取り組んでいく。それとともに、家庭や地域においても学年・学級懇談会、学校だより等で積極的に理解を求め、フィルタリング、ペアレンタルコントロール、研修会等の未然防止や、早期発見・早期対応へ向けた取り組みを連携・協力して行っていく。
- ・ 早期発見の観点から、学校の設置者等と連携し、学校ネットパトロールを実施することにより、ネット上のトラブルの早期発見に努める。また、児童が悩みを抱え込まないように、法務局・地方法務局におけるネット上の人権侵害情報に関する相談の受付など、関係機関の取組についても周知を図る。
- ・ ネット上の不適切な書き込み等については、被害の拡大を避けるため、直ちに削除する措置をとる。名誉毀損やプライバシー侵害等があった場合、プロバイダに対して速やかに削除を求めるなど必要な措置を講じる。こうした措置をとるに当たり、必要に応じて法務局又は地方法務局の協力を求める。なお、児童の生命、身体又は財産に重大な被害が生じるおそれがあるときは、直ちに山形警察署に通報し、適切に援助を求める。

## 5 重大事態への対処

### (1) 調査組織の設置（法28条①：必置）

- ・ いじめにより、当該児童の「生命、心身又は財産に重大な被害が生じた疑いがある」と認める時、または、いじめにより、当該児童が「相当の期間（年間30日を目安とする）学校を欠席することを余儀なくされている疑いがある」と認める時、重大事態への対処、発生防止に資するため、下記の第三者による調査組織を設け、質問票の使用、その他の適切な方法により重大事案に係る事実関係を明確

にするための調査を行う。

#### <重大事案と想定されるケース>

- 児童が自殺を図った場合
- 身体に重大な傷害を負った場合
- 金品等に重大な被害を被った場合
- 精神性の疾患を発症した場合                    等

#### <組織の構成>

※ 校内におけるいじめ防止のための組織を母体としつつ、村山教育事務所「いじめ解決支援チーム」の支援・協力を得る。

(具体的な調査組織の構成員については山形市教育委員会の指示を仰ぐ)

- 弁護士
- 精神科医
- 学識経験者
- 心理や福祉の専門家等の専門的知識及び経験を有する者

※ 当該いじめ事案の関係者と直接の人間関係又は特別の利害関係を有しない者(第三者)

#### (2) 校内の連絡・報告体制

- ・ 校内における連絡・報告体制は、別冊「防災マニュアルダイジェスト版」による。

#### (3) 重大事態の報告

- ・ 校長は、当該調査に係る重大事態(疑いがあると認められるときも含む)の事実関係、その他の必要な情報等について、素早く山形市教育委員会を通じて山形市長へ報告する。

#### (4) 外部機関との連携

- ・ 重大事案に係る事実関係の調査、及び事後対応、発生防止等については、必要に応じ山形市教育委員会、山形警察署、児童相談所、村山教育事務所の「いじめ解決支援チーム」と連携を図りながら進めていく。

## 6 教育相談体制・生徒指導体制

#### (1) 教育相談体制と活動計画

- ・ 「心のアンケート」の実施、それを受けた「児童面談」を通し、児童の心の声を拾いあげ、いじめの問題の未然防止、早期発見、早期対応に努める。
- ・ 担任、特別支援コーディネーター、養護教諭、子どもふれあいサポーター等の連携により、教育相談体制を機能させる。

#### (2) 生徒指導体制と活動計画

- ・ 児童にとって実感のともなう活動ができるよう、どの活動においても価値付けを行い指導する。
- ・ 指導方針の共有、組織的指導を常に意識して指導、支援にあたる。

## 7 校内研修

### (1) いじめの理解、組織的な対応、指導記録の生かし方等に関する研修計画

- ・ いじめに係る研修を年間計画に位置づけ、学期に一度、いじめを始めとする生徒指導上の諸問題等に関する校内研修を行い教職員の共通認識を図る。
- ・ 特に「道徳の授業」の充実、「生徒指導の機能を生かした授業づくり」について研修を深め、いじめの問題の未然防止に努める。

## 8 学校評価

### (1) いじめの問題への対応と評価の基本的な考え方

- ・ 学校評価において、その目的を踏まえて、いじめの問題を取り扱う。この際、いじめの有無やその多寡のみを評価するのではなく、問題を隠さず、いじめの実態把握や対応が促されるよう、児童や地域の状況を十分踏まえた目標の設定や、目標に対する具体的な取組状況や達成状況を評価する。また、評価結果を踏まえてその改善に取り組んでいく。

### (2) 校内におけるいじめの防止等に対するPDCAサイクル

- ・ いじめ防止のための組織が策定した長・短期計画に基づき、常に組織的な対応による、いじめの問題の未然防止、早期発見、早期対応の取組を徹底し、その都度取組状況を児童の視点で客観的に振り返り改善を図っていく。
- ・ 学期末の職員会議において、いじめの問題への対応について成果と課題を確認しながら改善の方策を明確にし、全教職員で共通理解を図る。

### (3) 地域や家庭との連携

- ・ 学年、学級懇談会や学校だより等において、いじめに係る学校基本方針やその取組、学校評価の結果等についてお知らせし、いじめの問題の重要性の認識を広めるとともに、家庭や地域との緊密な連携協力を図る。

## 9 その他

### (1) 社会参画活動、縦割り活動による自己有用感、自己肯定感の育成

- ・ 地域行事やスポーツイベントへの積極的参加、縦割り兄弟学級による異年齢交流等を通し、児童の自己有用感、自己肯定感を育成し、いじめの問題の未然防止に努める。

### (2) 校務の効率化

- ・ 教職員が児童と向き合い、いじめの防止等に適切に取り組んでいくことができるようにするため、一部の教職員に過重な負担がかからないように校務分掌を適正化し、組織的体制を整えるなど、校務の効率化を図る。